

〔古事記傳<sup>十七</sup>〕聶夫は御牟古能君と訓べし、たきや古とのみ訓むは、和名抄に、爾雅云、女子之夫、爲婿作聶聶、和名無古と見え、字鏡には聶毛古とあり、

〔文德實錄<sup>八</sup>〕齊衡三年六月丙申、正三位源朝臣潔姬薨、潔姬者嵯峨太上天皇之女也、母當麻氏、天皇選聶未得其人、太政大臣正一位藤原朝臣良房弱冠之時、天皇悅其風操超倫、殊勅嫁之、

〔古事談<sup>二</sup>〕堀河左府藤原顯光知足院殿藤原忠實ヲ聶ニ奉取、賞翫之餘、常被奉仕陪膳、每進汁物先啜、試テ氣味調タルニ、飯ヲ漬テ被奉ケレバ、無便トオボシナガラ食給ケリ、其由大殿ニ被語申ケレ

バ、暫御案アリテ被仰云、左府モ可然之人也、有何事哉云々、

〔空穂物語<sup>藤原の君</sup>〕かむつけの宮とて、ふるみこおはしましけり、そのみこは物ひがみ給へるみ

こにておはしける、ほいたくいまよにあるかんだちめみこたち、この殿のむこになるを、今さら我をもせんとて、めをもおひはらひて、今左大將の家にいきて、我すめらんにくす人たらば、思ひ

うとみなむとの給て、まちおはしますにおひいで給ま、に、みなこと人々に奉り給つ、このみこさりと、我をみこかすにいれ給はざらんやはとおもほすに、八君とおひ給とき、て、これな

らんと待給へば、左衛門のかみに奉り給と、きこしめしおどろきての給やう、あやしうこの大將の我思ふことをまだなさぬかなとの給て、あまた、び御せうそこあれど、殿うちにはわらひの、

まりて御返なし、おほかたは九にあたるあんなり、それをさしはへていはんとて、あて宮に御ふみあり、されどあやしき物に思ほし聞え給はず、此みこよろづに思ほしはぎて、おんみやうし

かむなきはくち、京わらははへ、をうな、おきなめしあつめての給はく、我此よにむまれてのちめとすべき人を、六十よこく、もろこし、まらぎ、こま、天ぢくまでたづねもとむれど、さらになし、この右

大將源のまさよりのぬしのむすめども、十よ人にかゝりてあなり、

〔枕草子<sup>四</sup>〕あぢきなきもの